



愛光NEWS

2021年3月

2021（令和3）年4月15日発行

（編集）愛光本部総務部

（TEL）043-484-6391

（メール）<http://www.rc-aikoh.or.jp/>

桜前線は、各地で記録的な早さの開花となりました。平年より高い気温の日が多く、季節の進み方を早く感じます。愛光敷地内には3月だというのに早くもツバメが飛来してきました。

法人創立50周年記念樹のしだれ桜が、4月1日の辞令交付式を待っていたかのように満開となり、新任職員を囲んでの記念撮影を演出してくれました。新任職員の皆さんは、緊張と期待とが顔にあられていましたが、今後の活躍を期待したいところです。

□事業経過など（2021.3.1～）

月/日(曜)	記 事
3 / 4 (木)	業務執行理事会
4 (木)	メンター制度委員会／はちす苑職員 PCR 検査（～5日）
5 (金)	予算ヒヤリング／首都圏4都県緊急事態宣言21日まで延長
8 (月)	リホープ職員 PCR 検査
9 (火)	感染症委員会・衛生委員会／業務執行理事会
10 (水)	サービス責任者会議
11 (木)	広報委員会／ルミエール・めいわ職員 PCR 検査
11 (木)	東日本大震災から10年
13 (土)	理事会
14 (日)	東京で開花宣言
18 (木)	法人創立記念日
19 (金)	ボランティア委員会
20 (土)	春分の日
22 (月)	業務執行理事会
24 (水)	施設長会議
25 (木)	東京五輪聖火リレースタート
26 (金)	労務管理者研修（リモート）
26 (金)	2021年予算過去最大額で成立（コロナ予算5兆円）
27 (土)	評議員会
30 (火)	コンプライアンス委員会
31 (水)	退職辞令交付式
4 / 1 (木)	辞令交付式／新任職員研修（～6日）



■おもな出来事

□職員のPCR検査（第1回）は全員陰性

前号でお知らせしました、高齢者施設及び障害者支援施設に従事する職員に対するPCR検査は、3月に5日間にわたって実施されましたが、全職員が陰性であるとの報告があり、とりあえず安心しました。この唾液によるPCR検査は、4月から6月にかけても3回実施される予定です。

新型コロナウイルス感染症は、緊急事態宣言が解除されましたが、ホッとする間もなく、東京都を含めた1都2府3県に「まん延防止等重点措置」が発令されました。変異株のウイルスによる感染も広がっているようで、引き続き警戒が求められています。マスク着用、手指消毒など日常化しつつありますが、気をゆるめず感染対策の徹底をはかる必要性を感じます。

□いよいよ始まるワクチン接種

この件も前号の続報です。新型コロナウイルスワクチン接種は、各自治体にその対応が任せられ、4月12日より65歳以上の高齢者向けにスタートしています。佐倉市での当面の対応は下記のようなようです。

- ワクチンは、アメリカファイザー製
- 接種対象者：65歳以上の特別養護老人ホーム等入居者が優先（その後、一般の高齢者）
- はちす苑接種日時：4月28日 特養・ショートステイ利用者
5月12日 はちす苑従事職員等
5月19日 特養・ショートステイ利用者（2回目）
6月以降 はちす苑従事職員等（2回目）

□事業計画などを承認（理事会・評議員会）

3月13日（土）、2020年度第6回（通算第301回）理事会が、理事10名、監事1名の出席により開催されました。また、3月27日（土）には2020年度第3回（通算第67回）評議員会が、評議員11名の出席により開催されました。

議案は、2020年度補正予算、2021年度事業計画及び予算、諸規程の改正でした。例年は、理事会、評議員会とも各施設長等の管理職員はオブザーバーとして出席するところですが、三密回避を考慮して評議員会への出席は、断念しました。

□力強い宣誓（辞令交付式）

4月1日（木）、新任職員8名を迎えての辞令交付式が行われました。当日は、昇進職員1名、異動職員8名、雇用変更職員3名も辞令を受けました。理事長、副理事長の挨拶の後、理事長より新任職員一人一人に辞令が手渡され、新任職員を代表して「宣誓のことば」が力強く伝えられました。法人の将来を担う人材に、同席した幹部職員や先輩職員たちから励ましの拍手が贈られました。その後、4日間に渡って、新任職員研修が実施され、それぞれ支援や介護の現場へと向かいました。

■月報から

□それぞれの涙（福祉相談室）

3月は別れの季節と言われるが、特にこの3月は利用者それぞれの生活の変化や涙を目の当たりにする機会が多かった。

Aさんは、入所当日、母親の涙が止まらなかった。本人は新しい環境を感じながら、落ち着いて過ごされていたが、母親はなかなか離れられず、13時に来所し、ようやく帰宅されたのが16時すぎであった。その後もほぼ毎日施設に電話をかけ、本人の様子を気にされている。

Bさんは、母子ともに入所に伴って別々の生活になることを覚悟して来所された様子があるものの、母親の帰宅後には、本人がほろりと涙を流したとのことであった。

Cさんは、ZOOMを使用し担当者会議を実施した。母子ともに同居は難しい現状を説明し、それぞれの意思確認をするために行った。事前に母親から本人に、めいわでの生活（入所）を促すと聞いていたが、実際には「（決定は）もう少し待っててね。」という言葉であった。母親としてはそれ以上の言葉をいうことができなかつたと思う。本人にとっては“待てばよい”という認識になるこの言葉。現実からは離れており、最後に本人が涙する場面は、とても心苦しかった。

Dさんは、盲学校卒業後の進路として相談を受けた。本人は地域で生活する力が十分ある方ではあるが、母親が支えきれないとギブアップしての相談だった。母親は相談の中で、進路を決めてあげられないふがいなさから、その都度言葉を詰まらせ、大粒の涙を流された。

それぞれを受容するだけでは進まない。本人の生きる道を考えるお手伝いをする。その関りの重さをそれぞれの涙から感じる3月であった。（福祉相談室相談員 林 拓也）

□創立記念行事食（栄養管理室-高齢者福祉事業部）

1955年3月18日は、愛光が社会福祉法人の認可を受けた「創立記念日」である。創立66周年のお祝いに、お赤飯を用意した。一番入所者に喜ばれるのがマグロのお刺身である。びんちょうとろマグロを一口に切り、長芋のすりおろしをかけて『マグロの山かけ』をお出した。皆さん綺麗に召し上がっていた。デイサービスのご利用者は、「ちょうどよい日に来た！良かったわ」とマグロとめぐりあえてラッキーだと話して下さった。お口直しは、ココナッツミルクゼリー。口当たりの良いココナッツミルクは、乳製品が苦手な方も自然に食べられることから、少し前からデザートに取り入れている。

（高齢者福祉事業部管理栄養士 江口 貴子）

□「縁」を大切に（ルミエール）

12日に28歳の男性が入所となった。ご家族の体調、介護負担の関係で今まで平日を短期入所、週末を自宅で過ごす生活を続けており、入所施設を探していたが見つからなかったと相談支援事業所から愛光の福祉相談室に連絡があり入所を進めてきた。地域で盲重複障害の人が生活の場を求めている現状があり、表に出てこないケースもたくさんあると思われるが、今回のような『縁』を大切にしていきたい。（ルミエール課長 原 宏之）

□女性だけのひな祭り（めいわ）

6日（土）、利用者からの意見でひな祭りのイベントを行った。ビックイベントではないが、テーブルの上には、お花を飾りいくつかの種類のケーキを並べ、食べたいものを選ぶ。ケーキを前にした利用者の皆さんの表情は、笑顔でいっぱい。

おそらく女性だけのひな祭りイベントは初めてであるため、これからも毎年続くのも楽しい。

（めいわ課長 李 連淑）

□自治会会長交代（リホープ）

自治会会長が20年振りに交代した。24日に行われた役員選挙に先立ち、8日には立会演説会を行った。昨年度入所した利用者が、今年度中に地域移行したいと思っており、年度いっぱい務められないかもしれないが、それでも会長として頑張りたいと手をあげ、これまでの会長との一騎打ちとなった。結果、20年振りに新会長が誕生した。新会長が目指すのはルールとマナーを守り、より良い生活ができるリホープ。週末には皆が集え、おしゃべりができる喫茶コーナーを作る等のアイデアを出している。新しい自治会が動き出す新年度、新型コロナウイルスの影響で、これまでとは違う発想が求められるようになった昨今、新会長の誕生でどのような変化があるか楽しみにしている。

（リホープ課長 稲垣 直子）

□これが大人の社会だ（根郷通所センター）

根郷通所センターのおひさま2では、利用者は給食を配膳される順番が決められている。呼ばれた人から御飯と味噌汁を自分で盛り付け、自分の机で食べ始める。一番最後に呼ばれた人が食べ始める頃には、既に食べ終えて下膳している人がいる。呼ばれるまでは、向かいの席で食事を始めている人を見て、じっと待つしかない。後で呼ばれた人は、食後の休憩時間も短くなってしまう。はたして、この光景が大人の社会と言えるのだろうか…。

食事の際、確かに支援が必要な利用者もいる。だが、必要な利用者は、おひさま1で配膳をおこなっている。おひさま2で食事をする利用者は、支援の必要がない利用者が大半であるにもかかわらず、職員からは何の疑問も上がらなかった。根郷通所で毎日おこなっている業務のため、当たり前光景になってしまっているのだ。

そこで、セルフ方式はどうか検討した。職員からは、御飯を盛り付ける時に混乱するのではないか、多数集まって食事をこぼしてしまう利用者がいるのではないかなど意見があがった。しかし、試してみないことにはわからない。

試みることにして、仮の台車に各自の食事を乗せ、「さあ、どうぞ」と一斉に声をかけた。何てことはない。混乱どころか、お互いに譲り合って御飯を盛り付ける。「先に良いよ」と声をかける利用者がいれば、「俺は後にするから」や「ゆっくりよそいなよ」と皆口々に声をかけ合う。これが大人の社会だ。何回か試すうちに、「さあ、どうぞ」と声をかけなくても食事を取りに行くようになった。

セルフ方式にした結果、ほぼ同時に皆が食べ始め、待たされる人もいなくなり、食後の休憩を皆が確保されることとなった。職員も一人ひとりに運ぶ手間が省け、時短となった結果、歯磨き介助等の別業務にも従事できることとなった。

今回のケースをもとに問題意識を持って支援に取り組んでいるか、自分の常識が非常識となっていないかを見つめ直し、既存のことから脱し新たな道を開拓することへの喜びを味わうことのできるプロフェッショナルな職員へと成長して欲しい。

（根郷通所センター主任 高梨 和憲）

□愛光さんにお世話になって（佐倉市よもぎの園）

先日、刺繍マスクを大量に注文して下さった方がいた。打ち合わせを兼ねて連絡をすると「家族が愛光に大変お世話になって何かの縁とマスクを注文しました」とのことであった。その後、事業所に来所されお会いすると、佐倉市役所でのマスク販売会の時に買ったださった方の一人で、その時に「愛光さんなんですね」と話されていたのを思い出した。マスクは家族や知り合いに配るとのことであった。

愛光との関りも話して下さり、以前ご家族が“はちす苑の訪問介護サービス”をご利用されとても良くしていただき大変感謝をしているとのことであった。

地域との関りが多いよもぎの園としても、はちす苑のように信頼され、良かったと思ってもらえるサービスを実践していきたいと改めて感じた。

（佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一）

□「正解ではない」でもいい（ジョーの家）

障害卒の雇用で働いてきたが長続きせず1、2年で雇止めになることが繰り返されている利用者がいる。つながりのある就労移行支援事業所の支援を受けて再就職する道もあるが、長続きしない就労についてのメカニズムが、就労移行支援事業所から分析されることがなかったため、今回はジョーの家側からの働きかけで、就労継続支援A型と就労継続支援B型を経験してもらい、福祉事業所で働くという選択肢も検討してもらった。

その結果「A型で働きたい」という本人の意思を確認した。一般の企業より厚いサポートがあること。就業時間帯が一定で体調が安定すること。更に“健常者に交じって働く環境”と“同じような障害を持つ方と同僚としての関係を築いていくことができる環境”を比べることができたのも本人にとって大きかったのではないかと思う。

支援者が勧めれば「じゃあそれで」と言ってしまう部分がある人だが、一つ一つの選択肢を本人に体験してもらい、その上でスタッフの提示したメリットデメリットを踏まえ、本人の自己決定に結ぶことができたと思う。

とはいえ、この選択も「正解ではない」と思う時が来るかもしれない。しかしそれはそれで良い。私たち支援者がすべきなのは「正解」へ急がせることよりも、正解ではなかったという経験を踏まえて、何度でもその人の自己決定がなされる状態を作り出していくことではないかと考えているからである。

（ジョーの家サービス管理責任者 宮部 和樹）

□静かなお花見（はちす苑）

地球温暖化の影響か桜の開花は年々早くなり、今年も山王公園の桜は、3月下旬にほぼ満開の状況でした。思い起こせば昨年は2月下旬より新型コロナウイルス感染症対策として外出や面会の自粛を開始し、お花見も中止となりました。コロナに対する知識も浅く、過度な恐れから公園に人がいたら散歩も控えていた昨年でしたが、知識も深めたウィズコロナの今年は感染対策を万全に整えて交代で満開の桜を見に行きました。利用者の皆さんも満面の笑顔で桜を眺め「キレイ」「春だね」「近くにこんな素晴らしい公園あったの」と個別でですがお花見を楽しまれました。「来年こそは皆で集まってワイワイお花見したいなあ」と心から願うばかりです。

（はちす苑課長 戸室 輝大）

□佐倉市が目指す自立支援とは！？（総合相談センター）

3日（水）、市内5包括の職員を対象に、「介護予防のための地域ケア個別会議」の勉強会が開催された。千葉県千葉リハビリテーションセンター地域リハ推進部の田中先生を講師に、市の担当職員と包括職員40名がオンラインでつながり、地域ケア会議の目的、市が目指す方向性の共有を行った。

佐倉市における「自立支援」とは、「単に身体的自立を指すのではなく、生きがいや役割を持って、自分らしい自分で決めた生き方を選択できること」と示された。そのためには、多職種が連携しながら自立支援に資するケアマネジメントの実践力を高める必要がある。そこで、地域ケア会議をどのように開催し運営していくかが鍵となる。

今年度から、各包括において年10例以上の「介護予防のための地域ケア個別会議」を開催することとなった。この会議は個別課題から地域課題を把握し、地域づくりや資源開発、さらに政策の形成へと発展していく機能を持っている。今回の勉強会を経て、包括に課せられた役割は大きい、「やらなきゃいけない」ではなく、「使いこなそう！」という意識が大事だと学んだ。人の暮らしや生き方を支えるには多面的な視点が必要であり、一人一人が暮らす地域全体を考えることにもつながる。地域の多職種に助言者として参加して頂きながら、新たな地域ケア会議を根付かせていきたい。

（総合相談センター所長 森 由美子）

□状況にあわせて（南部児童センター）

来館した母親が、「子ども（9か月）の口の中に入っていました。」と、床に貼ってあったラインテープの切れ端を持ってきた。あわや誤飲になる場面！母親に謝罪するとともに、環境整備のあり方について再検討した。

昨年3月から、約2か月半の間臨時休館をせざるを得なかった。やっと6月中旬から再開したが、感染症対策の一環として、当初は遊具の貸し出しはしなかった。遊具がなくても「おにごっこ」などであそぶときの目印になるようにと、ゆうぎ室にたくさんのラインテープを貼った。12月からは、卓球やバスケットボールの貸し出しの開始に合わせて、フロアのあそびや、来館者の動きにも変化してきた。しかし、床に貼ったテープや掲示等が、再開当時のままにしていた。現在必要なものなのかを検討しないまま、次から次へと手立てを上乗せしてしまっていることに気づいた。改めて環境を再点検し、不要なものは撤去することにした。1回設置してしまったものや、決まりごとを変更するときに「ためらう」ことがある。コロナ禍、利用者目線に立って、柔軟にしなやかな対応を心がけて行きたい。

（佐倉市南部児童センターインストラクター 鈴木 信子）

□「多分・・・」(学童保育所)

ある学童保育所のKさんは、小学2年生の女子である。家庭の環境からも影響を受けてか、なかなかワイルドで、姉妹の髪を引っ張る・放り投げる、大好きな男子のみぞおちに裏拳をお見舞いする(その男子が泣いてしまうほど)、ケンカをした相手の顔にグーパンチ!・・・。

「すべての原因が怒り」ではなさそうだった。楽しそうにしていることも多く、表現方法が間違っている様子で、とにかくとっさに誰に対しても手や足が出てしまう。職員は、してはいけないこと、愛情表現についてなど、その都度話をしてきた。成長に伴って本人が困らないように、本人の良さが正しく周りに理解されるようにと願いつつ。うるさがられたこと、反論されたことは数知れない。学童を嫌いになってしまうのではないか、職員をウザイと嫌ってしまうのではないかなどと恐れつつも、その都度伝え続けた。

最後の利用の日も同じだった。職員は、最後の日だからより一層熱を込めて話をした。「うんと嫌われて、さよならかな・」と職員の気持ちも曇った。最終降所時、彼女から「多分・・・お世話になった!!」と大きな声と笑顔を学童に残して去った。意地っ張りな彼女なりの精いっぱい表現だったのだろう。みんなで力一杯、手を振って送った。

これだから、この仕事はやめられない。(学童保育所主任 齋藤 理江)

□「趣味」や「生きがい」について(南部地域福祉センター)

緊急事態宣言が解除され、センターも23日(火)より開所となった。緊急事態宣言が発令された前の状況に戻り、継続した感染症対策の条件がある中での利用となっている。囲碁では、碁盤の上に飛沫防止シートを立て、利用者の方はビニール手袋を使用して打っている。終了後は、碁石を毎回消毒している。利用者の方も、感染防止対策や消毒にたいへん協力的である。囲碁の部屋をのぞきに行くと、部屋の中は静かで、熱心に碁盤の前で考えながら碁石を打っている。みなさん、本当に囲碁が好きで、楽しみにしていらっしゃるのを感じさせられる。

また、ヨガでは、利用者より「再開できて本当にうれしい」「月3回、このセンターに来て、ヨガをやれるのが、私の生きがいである。ぜひこれからも続けてほしい。」などの意見が多く聞かれた。ヨガの講師からも、「地域のシニア層の介護予防につなげていきたい」という強い意志をうかがうことができた。コロナ禍の中ではあるが、センターの事業が地域の利用者の「趣味」や「生きがいづくり」に今後もつなげていければと考える。

(南部地域福祉センター所長 横川 民夫)

■職員状況(3/31現在)

	人数	前月比
正職員	173	
サポート職員	38	-1
非常勤職員	145	+1
計	356	